

## 死者と生者の間に③

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

それぞれの社会はそれぞれ「死の文化」と呼べるものを持っています。医療人類学は、それらは社会の産業構造や工業化、多様性と関連し、集団行動を伴う儀礼を中心に発達する「死の文化」と、観念的な言語表現によって伝達されやすい「死の文化」とに大別します。仮に前者を「儀礼中心の死の文化」、後者を「言語表現による死の文化」とすると、前者はいわゆる「伝統的社会」に特徴的で、後者は近代化が進んだ先進国で発達しているということです。ただし、日本のように近代化が進んでいる社会であっても、比較的伝統的社会の特徴を併せ持つ社会にあつては、儀礼中心の死の文化が伝承されていると見なされています。波平恵美子さんは、日本で脳死が社会問題として浮上してきた日本の社会的状況を分析し、日本人の死の捉え方について、(1)日本人は死一般を語ることは少なくとも、個別の死についての関心が強い。(2)日本社会全体は、人間関係の緊密さや持続性が社会経済活動で有利に働くことが多いような社会制度を発達させてきた。(血縁、地縁、会社縁、出身校などなど)。(3)(4)(5)は略。波平恵美子『病と死の文化 現代医療の人類学』朝日新聞社、1990年、pp.43～44 参照。)

## エンバーミング

知られている限りにおいて「遺体にこだわらない文化」はなく(同書、p.14)、そのこだわりが文化の相違として現れているのだということについて、波平さんはいくつかの例を示します。

たとえば、アメリカにおけるエンバーミングについては、藤井正雄著『骨のフォークロア』から「(アメリカ人にとって)死者から死の苦痛・汚れを隠べいして、あたかも眠っているが如き錯覚を遺族に懐かせるのであり、死の否定・生の偽装のパフォーマンスであるといえよう」と紹介しています。また、エンバーミングを学び、カリフォルニアでエンバーミングを調査した鈴木英雄氏の研究から、エンバーミングを施すエンバーマーとは、基本的には遺族のために「錯覚」を造り出す職業であるという記述を引用しています。つまり、死者が死の苦しみから解放され、棺の中ではあるけれども、いつものように休んでいるという状況を親族や友人たちに提供することがエンバーマーの重要な仕事であるということです。なぜなら、死顔は遺された人々の心に残る最も強烈な思い出らしいからで、この錯覚は「メモリー・ヒクヤァー」(思い出のひとつ)と呼ばれます。親族や友人など遺された人々にトラウマを残さないようにすることが重要であるとみなされています(同書、p.17)。

また、アメリカは他民族で構成され、それぞれに異なった文化的宗教的背景を持つているにもかかわらず、「アメリカにおいては、エンバーミングを始めとする死の儀礼が一様であること、宗教や民族文化や地域の別に伴う差があまりにも少ないことは驚きである」という文化人類学の成果を紹介しています。さらに、エンバーミングが葬儀屋に牛耳られていること、それにもかかわらず多額の費用を支払ってエンバーミングを依頼している現状について、そのような葬儀がアメリカ人の観念形態に適合し、葬式に何らかの価値を見出しているというジェシカ・ミトフォードの研究に言及しています(同書、pp.16～17)。

## 複葬あるいは二次葬：インドネシアのダヤク族の場合

インドネシアに住むダヤク族は、高い地位の者が死ぬと、その死体はすぐに処理されるのではなく、まず屋内に置かれる。人々はその死体が腐敗し、骨となり、その骨が乾いた状態になったあとで「本葬」を行う。およそ8カ月から1年、2年、長いと10年を要する。波平さんは、このような本葬までに長い時間がかかるのは、本葬が死者に捧げられる祭りであり、人々はそこに至る長いプロセスに重要性を見出し、本葬のために準備するためであると指摘しています(同書、p.27)。本葬には、多くの人々が集まり、死者は祖先たちと一緒にになり、集まった人々もやがてはその祖先たちと一緒になれるということに慰めを見出しているときれます。この葬祭を紹介研究したのは社会学者ロベール・エルツで、彼は「遺体の取り扱いの様式が、その社会の信仰体系だけではなく、社会組織や価値体系などにかかわる『現象複合体』とも呼ぶような重要な現象である」ことを明らかにしたと波平さんは言っています(同書、pp.27～28)。波平さんはダヤク族の葬祭について次のように解説しています。

彼らの家族や村落の社会組織、自分達がダヤク族であり、ある地域のある家族の成員であるという帰属意識、死と再生の観念と、それに反映されている自己存在の観念と結び付いた「複合観念」の一つの表現であることが明らかにされたのである。(中略)ダヤク族が死体に対して、死んですぐから本葬に至るまでの間に行う行為の一つ一つは、彼らが、人間の存在はいかなるものであり、また人間の存在は、死と生においてどのような差異があるかということについての象徴的表現を含んでいるということもできよう。(同書、p.28)

二次葬に相当するものは、他にもあり、沖縄の洗骨などはよく知られています。洗骨は、一度土葬あるいは風葬などを行った後に、死者の骨を海水や酒などで洗い、再度埋葬する葬制のことで、沖縄諸島では「シンクチ(洗骨)」、奄美群島では「カイソウ(改葬)」と言われ、かつての沖縄などでは、よく見られる葬制であったとされています。産経新聞社は、鹿児島県と論島とその周辺だけに残る土葬した人の骨を掘り起こし、洗い清める「洗骨」と呼ばれる儀式を論島で取材しています。5年前に亡くなった叔母に地元の黒糖焼酎や米を供え、両手を合わせた後、男衆がスコップで砂地を掘る。頭蓋骨が白骨化せずミイラ化していたら、この世に未練があるとされ、埋め戻される。骨は水で洗い清められ、青いカメに足から順番に納める。喉仏を入れ、頭蓋骨を置いてふたをしめる。最後に先祖のカメのそばに埋められ、儀式は1時間ほどで終わる。骨を洗うのは嫁の役目と決められていました。なぜ骨を洗うのかについては「きれいにするため」と答えが返ってきたそうです。「例えば戦死者の遺骨収集で泥のついたまま納めますか。きれいに洗って磨くことは先祖に対する礼儀の基本ではないでしょうか」。洗骨は、かつて一家の嫁が嫁として認められるための「踏み絵」という意味もあったとも言われます。洗骨は5年目の後も本来は何度か行われ、33回忌では、白装束をまとった遺族が、踊りながら練り歩く「天上市」という儀式を行うということです。死者を「カミ」に昇天させる瞬間であり、その後は仏壇ではなく、神棚に祭られるとのこと。「死を考える 第6部葬送の行方3洗骨」『産経新聞』2006年12月20日